

即興ミニ漫才づくりとネタに見られる特徴： 学部言語科目における漫才ワークショップの可能性

Improvised Mini *Manzai* Creation and Types of *Boke* in *Manzai*: The Potential of *Manzai* Workshops in Undergraduate Language Courses

鈴木 美加・島岡 学

Abstract

As a sequel to a paper by Suzuki and Shimaoka (2022) on *manzai* workshops and student learning, this paper presents content from the second half of the workshop analyzing the *manzai* material created, according to Kinsui's (1992) classification of *boke* in *manzai*, by the participating students. Finally, the competences and knowledge that can be developed in a *manzai* workshop are examined in light of Ackermann's (2010) assertions regarding language competence and communication.

Keywords

漫才づくり、ワークショップ活動、複数言語使用、ボケ(ズレ)の分類
producing a *manzai* skit, workshop-style activities, learning through plural languages, types of *boke*

1 はじめに

本稿は、鈴木・島岡(2022)で示された漫才ワークショップと参加学生の学びに関する検討に続き、ワークショップ後半の内容を示すとともに、受講学生作成による漫才ネタの特徴を、金水(1992)の漫才のボケの分類を参考に確認するものである。さらに、Ackermann (2010)の主張する言語能力およびコミュニケーションの観点を踏まえ、漫才ワークショップで養える能力や知識に関して検討を行う。

2 漫才ワークショップの概要

東京外国語大学国際日本学部の「メディア日本語」科目では、受講学生(日本語母語学生と非母語学生)が現在のメディア状況や伝達情報の特徴を観察、分析すると同時に、メッセージを創る活動も行い、その一環として「漫才ワークショップ」を実施している(図1参照¹⁾)。ワークショップでは、

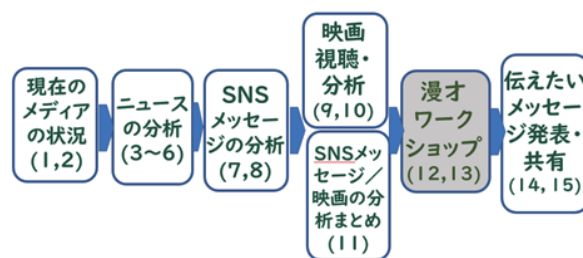


図1 「メディア日本語」授業の流れ

漫才に関するミニ講義と漫才ネタ作り、発表(ネタ見せ)を行う。鈴木・島岡(2022)で紹介した2020年度のワークショップは90分1コマによるオンラインZoom授業であったが、翌年度以降は2コマ設定とし、第1回オンラインZoom、第2回対面形式で開催している(図2およ

(1) 数字は授業回を示す。

び図3参照)。ワークショップの目的は、漫才ネタ作りや発表のテクニック上達を目指すというより、リラックスして参加し、漫才について知り、ほかの参加者とともに積極的に楽しむことであった。この2回分の授業の目標として、①漫才ワークショップを通して、漫才を体験し、その面白さを感じることができる、②ワークショップをきっかけに、メッセージを伝える方法としての漫才について、考えてみるることができる、という2点を設定した。

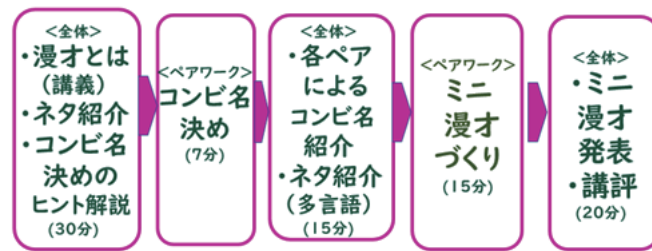


図2 「漫才ワークショップ」第1回の流れ



図3 「漫才ワークショップ」第2回の流れ

ワークショップの第1回の流れは、①講義(漫才について)、②ネタ紹介およびコンビ名決めのヒント解説、③ペア決めと各ペアのコンビ名決め、④各ペアによるコンビ名紹介、⑤ネタ紹介(簡単なバージョン)、⑥ミニ漫才づくり、⑦ミニ漫才発表(全体)、⑧講評、と進んだ。第2回は、第1回を踏まえ、三段オチの紹介、ネタ見せ(紹介;日本語・他言語)もなされ、第1回の学生ペアとは異なる組み合わせで、各コンビがミニ漫才をつくり、授業後半にクラス全体で発表がなされた。

3 漫才ワークショップ(第2回)のミニ講義:漫才の構成(日本語・他言語)

本節では、第2回ワークショップでの講義内容を以下に示す。ワークショップは第二著者が講師を務め、第一著者は授業を第二著者とともに運営した。第2回ワークショップでは、第1回の内容(鈴木・島岡 2022)をさらに進めて、基本的な漫才の作成方法を教示した。その内容のポイントを以下に記す。第1回ワークショップの主な内容は、鈴木・島岡(2022)を参照いただきたい。

3-1 漫才の構成

○飛び出し:(あいさつ)、「どーもー」と言って舞台に出てくる行為

デオチ:「どーもー」の挨拶の後、言葉を使わずジェスチャー(マイム)だけで笑いを取る、
例えば転ぶ、変な顔をするなど

○自己紹介:

A: xxx の xxx です。

B: xxx の xxx です。

A: コンビ名は?

B: xxx です。

AB: よろしくお願ひします。

○ツカミ: 本ネタに入る前に季語や時事問題を入れた一件(ひとくだり)のネタを披露する。

これをツカミと呼び、このツカミの後に本ネタを披露する。

○本ネタ(例 参照)

3-2 ネタの展開1:「回収」

最初に出たボケ(冗談)が最後に再び使われ、そのままオチとなる。回収は伏線回収とも呼ばれている。

例

A: どこから来たの?

B: あ、今 トイレから来た。

A: 今 来た場所じゃなくてどこの出身?

B: あ、自分は大阪出身。

A: 大阪出身なんだ。もし大阪に遊びに行くとしたらオススメの場所はある?

B: トイレ。

A: もういいよ。どうもありがとうございました。

3-3 ネタの展開2:「三段落ち」

やりとりの問いへの答えで、最初の2つが正しく3つ目が間違っているというパターン。「ラーメン、つけ麺、僕イケメン」が三段落ちである。最初の2つ目は実在する麺類であるが、「僕イケメン」は麺類ではないので間違っている。

例

A: 日本のスポーツは何が好き?

B: うーん 柔道かな。

A: 他には?

B: うーん 剣道かな。

A: 他には?

B: うーん 極道かな。

A: ずいぶん道を外れたね。

3-4 ネタの展開3:「かぶせ(天井)」

ボケが同じ形の冗談を単純に連続で繰り返す。「かぶせ」が5回連続するが、6回目でボケが正しいことを言う。これを「裏切り」もしくは「スカシ」と呼び、そのままオチになる。

例1(2回連続)

- A: ごはんの上に天ぷらを乗せると？
B: おいしい。
A: じゃなくて何という料理になる？
B: あー 天丼。
A: じゃ ご飯の上にカツの卵とじを乗せると？
B: おいしい。
A: かぶせてきたね。

例2(4回連続、5回目は「裏切り」となりオチとなる)

- A: どこから来たの？
B: あ、今 トイレから来た。
A: 今、来た場所じゃなくて出身地を聞いているの。どこから来たの？
B: あ、今 便所から来た。
A: かぶせてきたね。出身地を聞いているの。どこから来たの？
B: あ、今 お手洗いから来た。
A: 今、来た場所じゃなくて出身地を聞いているの。どこから来たの？
B: あ、今 化粧室から来た。
A: あ、今 来た場所じゃなくて出身地を聞いているの。どこの町の出身？
B: 御手洗町(みてあらいちょう)。
A: そうだろうね。

3-5 ボケの役割

ボケという言葉は「トボケル」という言葉から来ており面白いことを言う人、もしくは、おかしな人であり、滑稽である。ツッコミが簡単な質問をするが、ボケが間違える、これがボケになる。

例

- ツッコミ: あなたはおいくつですか？
ボケ: 23.5。

3-6 ツッコミの役割

「ツッコミ」とは「突っ込む」から由来しており、ボケの間違いに対して質問したり、訂正(説明)を加えるという役割である。

例

A: あなたは おいくつですか？

B: 23.5。

A: なんでやねん、それクツのサイズでしょ。

ボケに対して「なんでやねん」という質問の形を取り、間違いを説明している。関東では「なんでだよ」となるが関西弁の「なんでやねん」の方が漫才らしくなる。

3-7 漫才と地域性

関西(大阪)では関西弁で早口で漫才を披露する「しゃべくり漫才」が一般的であり、関東(東京)では見た目を重視した「キャラクター漫才」が主流である。漫才ネタにも地域性が反映する。

3-8 日本語以外の漫才(MANZAI)

留学生の出身国や参加者の学習言語による漫才(MANZAI)も可能である。ここでは、英語による漫才ネタの例を示す。ほかに、フランス語、イタリア語、スペイン語などによる漫才ネタもあり、文化や社会の状況に合った内容や演じ方も可能である。

例

A: Can I have your name?

B: My name is Takoyaki.

A: How come? Ask you again, can I have your name?

B: My name is Okonomiyaki.

A: How come? Ask you again, can I have your name?

B: My name is Yakisoba.

A: Oh! No Way….

AB: Thank you very much.

4 学生による漫才ネタの特徴:金水(1992)のボケのパターンを参考に

ワークショップでは、漫才の入門編となるミニ講義を聞いた上で、コンビ決めを行い、コンビで、①コンビ名決め、②漫才ネタ作り、③発表を行った。本節では、金水(1992)の漫才のボケの分類を示した上で、その各分類に対応する学生の漫才ネタを紹介、確認する。

4-1 金水(1992)の「ボケのパターン」

金水(1992)は漫才の会話について、「一見相手のいうことをまともに受けているように見えながら、しかし実は変である、というものでなければならない」とし、「つながりながら

ずれる」のが漫才のボケのあり方であり、「正常な会話と異常さとの落差」によるテンションには大小あり、緊張と弛緩が波のように繰り返されると述べる。グライスの会話の原則やリーチの丁寧さの原則を参考に、「しゃべくり漫才のボケとツッコミは、会話の原則とそこからの逸脱とそれに対する修復として分析できる」とし、ボケのパターンとして、網羅的ではないとしながらも、以下の6種を挙げている(金水 1992; pp.85-87)。学生の作成した漫才ネタの確認については、この6種に分けて行うこととした²。

- ・音の類似性(似通い):だじゃれ、聞き間違い(例スキーとすき焼きの話が並行して進む)
- ・単語の連想:連想により、話題がずれる
- ・論理的な誤り:よく考えると論理展開に矛盾がある
- ・様式の錯誤:曖昧な言い方で誤解を招く(例「さんこう」:「旧制第三高等学校」(京都大学の前身の一つ)あるいは「西宮第三尋常高等小学校」)
- ・態度や立場の食い違い:規範からの逸脱(例 目下の者が目上に人に、自らを謙遜することなく尊大になる)
- ・表現形式の不整:発音/文法/表現の言い間違い(による笑い)

4-2 学生の漫才ネタ

ここでは、受講学生ペアが作成した漫才ネタに、どのようなタイプのズレ(ボケ)が含まれているか、1タイプずつ順に例を示す³。文字で示しているが、会話の音声を聞いているようなつもりで確認していただきたい。

A 音の類似性(似通い):だじゃれ、聞き間違い(例 スキーとすき焼きの話が並行して進む)

同音異義語やミニマルペアの活用などをこのタイプに含めることとした。母語話者も非母語話者も、構音の位置が同じあるいは近い音(例「ト」と「ド」)を含む言葉を聞き間違えることがあり、それらをうまく使った例が見られた。①は同音異義語を、②は意外に似ている音で構成されている言葉をうまく組み込んだネタで、やりとりの構成の工夫も感じさせる。

なお、2回のワークショップで作る漫才ネタでは、ともに音の類似性を取り上げたネタが多い。これは、日本語母語、非母語学生ともに日本語の同音異義語の多さをうまく活かしたネタ作りをしているのだと言えそうである。

①コンビニ名:在日中国大使館(2022)

(2) 漫才のネタの分類については、ほかにも検討がなされている(申 2016など)が、数は少なくまだ確立されたものはないようである。

(3) タイプ別に示すにあたり、第一著者と研究協力者(本学の日本語教育学専攻大学院生)がネタを確認した。二者は、別々に全ネタについて、各ネタがどのようなズレ(ボケ)の特徴があるか、1つあるいは複数、該当するタイプを選択した。両者が全ネタについてのタイプ記載を完了した段階で、判断が一致したかを確認し、互いの判断を共有した。4-2に示すネタは、判断が一致したものを示す。なお、コンビニ名の横のカッコ内は、そのコンビが受講したワークショップ開講年度を示す。

A: この前多摩のカレー屋さんにいったの。
B: どんなもの食べたの？
A: これだよ(写真を出す)
B: これってなんていうの？
A: うん、あってるよ。
B: いやだからなんていうの？
A: だから、あってるって。
B: いや違うよ、これの名前を聞いてるんだよ。
A: ナンだよ！
B: どういうこと？
A: もういいよ！

②コンビ名:チュロス(2023)

A: 最近寒くなってきたねー。
B: そうだねー。
A: もうすぐクリスマスだし、この近くでショートケーキ売ってる所あるかな？
B: 駅前の薬局でしょうー。
A: 薬局、、、？
それは消毒液でしょ、もうええわ。
AB: どうも、ありがとうございますー。

B 単語の連想:連想により、話題がずれる

多義語による連想のずれや、複数言語間の言葉の意味の違いの活用も含めることとした。同音異義語の連想による違い、ズレはBのタイプとした。③は同音異義語を、④は二言語間の語の意味の異なりをうまく取り入れ、ボケ、それに続くツッコミも気が利いた反応になっている。

③コンビ名:東北地方(2022)

A: 好きな食べ物は何か？
B: たこ焼きです。
A: 私もタコ好きです。だからタコライスが大好き。
B: タコ入ってないよ。

④コンビ名:アンチ唐辛子(2023)

A: ねえねえ、日本語の漢字って昔朝鮮からきた渡来人って人が伝えたらしいよ？知ってた？

B: だから日本の漢字ってこんなに難しいのね。

A: え?なんで?

B: だって「トライ」って韓国語で頭のおかしい変なことばっかやる人間のことだよ。

A: そうなんだ~知らなかった!

でも言語の勉強はやっぱりトライアンドエラーなんだなって、ってなんでやねん。

AB: どうもありがとうございました。

C 論理的な誤り:よく考えると論理展開に矛盾がある

テンポ良く会話が進み、自然に感じつつ、「あれ?ずれてる」と感じさせるボケが含まれる。金水(2012)は例として、「右手に剣、左手に拳銃を持ちながら、この手紙を書いています」というボケを挙げている。また、聞かれた質問の意図からずらした形で答えるネタもここに含めることとし、以下の例(金水 2012)もCのタイプとした。

例

A: 先生、私のレポート、どうでしたか。

B: ああ、字がきれいだったね。

この論理展開の矛盾が含まれるネタは、先のAやBのネタより高度であり、漫才ワークショップ第1回では見られず、第2回に現れる。多義性のある語とその共起語や、似た発音の語の組み合わせや取り合わせの妙を感じさせるネタとなっている。

⑤コンビ名:ブラボー(2022)

A: 最近、物価上がったじゃない?

B: はいはい。

A: なんか、高くなったもの挙げてよ。

B: 玉ねぎ?

A: 他には?

B: お肉。

A: また?

B: 気温。

A: それは温暖化のせいでしょ?もういいわ。

⑥日韓首都(2023)

A: いらっしゃいませ~

B: すいません、骨なしキッチンください。

A: ああ骨なしチキンですね。レンチンしますか?

- B: うーん骨なしキッチン、ランチで。
A: なんでやねん。骨なしチキンをレ・ン・チ・ンで？
B: ああ、じゃあ骨なしチキン、リンチで
A: もうええわ。
AB: どうもありがとうございました。

D 様式の錯誤:曖昧な言い方で誤解を招く(例「さんこう」)

会話の前半にはあいまいに答え、誤解を招き、あとでそれがはっきりするようなやりとりが含まれる。順序や明確性に欠くボケの答え方が含まれる。会話が平行線で続くネタもこのタイプとされる。

例(金水 1992)

- A: 君はどここの学校や。
B: さんこうや。
A: さんこう、ははん、京都で勉強したんですか。
B: 僕はね、どうも不思議と大阪に住んでいていまだに京都は知らないんですよ。
…(略)…
A: 西宮、そんなところにさんこうってありませんよ。
B: 西宮第三尋常高等小学校。

⑦甘党(2023)

- A: 最近何してるん？
B: “しゅうかつ”してる。
A: 偉いやん。何してんの？具体的に。
B: “しぼう”動機書いてる。
A: 他には？
B: 写真もとったよ！
A: あとは？
B: もう思い残すことはない。
A: えっ、終活！？まだ死なないで！もうええわ。

今回行った漫才ワークショップでのネタ作りタイムは毎年約10分のみという短い時間であり、Dのタイプは1つのネタのみであった。⑦は、二つの意味になる言葉の活用と談話の流れの工夫により、漫才ネタの聞き手は前半は「ふんふん」と自然に受け止め、終わる直前に、「え？」という驚きともに「そうか！」と理解させるという構成のうまさが光ったネタだった。

E 態度や立場の食い違い:規範からの逸脱(例 目下の者が目上に人に、自らを謙遜することなく尊大になる)

立場の取り違いなどで、取るべき態度とは異なる態度、言い方をボケがするネタが該当する。急に、目下が相手に命令したり、けんかを売ったりするのも含む。コントでは時々見られる。

今回の漫才ワークショップでは、このタイプのネタはなかった。役割を決めて演じるようなネタがあまりなかったことも関係しているであろう。

F 表現形式の不整:発音/文法/表現の言い間違い(による笑い)

語や文法、表現の誤りをうまく活用したボケのタイプで、論理で考えた間違いではないものをこのタイプとした。文法のねじれ、受け答えの不一致も含めることとした。以下の金水(2012)の例では、AにほめられたBは謙遜、あるいは「ありがとう」を言えば普通の反応となる。ネタのボケでは、その予想を外し、リズムよく、さらなるほめを要求したところにズレが生じ、笑いが起きる。

例 金水(1992)

A: あんたきれいやね。

B: そんなこともっとゆうて。

今回のワークショップでは、意図しない言い間違いによるネタは少なかった。ただ、AあるいはBのタイプとFのタイプの両方の性格を有すると思われるネタもあり、1つのタイプなのか、2つのタイプを有するとするか、判断がつきにくいものがあった。この点については、今後の課題とする。

⑧コンビ名:MBTI

A: そうそう髪切ったんだ〜どう?

B: うん! かわいそう!

A: え、あ、うん、、、そういえば誕生日だったからこれ誕生日プレゼント!

B: ありがとう! とってもかわいそう!

A: え、あんまり好きじゃなかった?

B: ううん、わかいそうだとおもったよ!

A: あれ、もしかしてずっとかわいっていいたかったの?

日本語間違えて覚えちゃって可哀想

B: もうええやん。

AB: ありがとうございます〜

⑧は、言葉の学習で起こりやすい現象をうまく発話に組み込み、やりとりを展開させているネタである。日本語学習の途上で、「かわいい」と様態の「そう」を組み合わせたり、言葉の一部の音が入れ替わったりすることが起こる場合のあることを、聞き手もこのネタから感じることができるであろう。

5 漫才ワークショップで養える能力や知識とは

5-1 学生の授業コメントの結果からわかること

本稿において、これまでに、漫才ワークショップの概要とワークショップ第2回の講義内容、学生作成のネタの特徴の確認を行った。学生による漫才ワークショップに対する反応は好評で、授業コメントの結果も2020年度の授業コメントをまとめた鈴木・島岡(2022)の結果とほぼ同様である。図4に2022年度受講学生の授業コメントをKH Coder(樋口 2018)で分析し、作成した共起ネットワークを示す。また、表1に授業コメントの一部を示す。

図4から、学生コメント記述の共起として、「漫才-作る-面白い」、「言語-ネタ-考える」、「今回-体験-楽しい」、「間違い-学習-勉強-日本語/英語」、「学習-経験-勉強」といったつながりが見られる。これらは、元のコメント内容と突き合わせ、多くの学生が漫才づくりの面白さの発見をしたこと、言語学習の間違いを生かした漫才ネタの可能性への気づき、言語学的観点からのネタ分析の可能性への言及がなされたことによるとわかった。

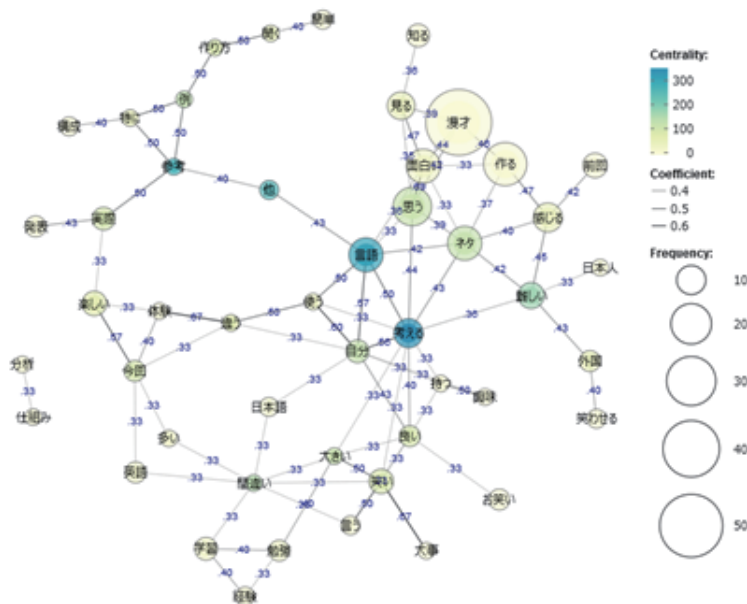


図4 授業コメント(第2回)データによる共起ネットワーク:
KH Coder(樋口 2018)を用いた分析

表1 ワークショップ(第2回)終了後の授業コメント(一部;太字および下線は発表者が付した)

<p>・漫才といえばテレビで見る娯楽で、学術的に学ぶものというイメージはなかったのでも新鮮でした。ネタ作成は想像していたよりも簡単で面白かったです。言語学的観点から日本の漫才と他の言語で行われる漫才を比較してみるのも面白そうだなと思いました。</p>
<p>・これは人生初めての漫才でした。よく考えたら、自分が日本語に興味を持つ理由の一つは漫才が面白いからである。漫才を言語の教材として使うのは天才的な発想だと思います。最高の授業でした</p>
<p>・今回、私は英語で漫才をするという初めての経験をした。日本語で漫才をつくるよりもさらに難しく感じ、自分自身では良いネタを思いつくことができなかった。しかし、英語漫才をつくろうと試みの中で、<u>言い間違いや勘違い</u>など言語学習に欠かせない「<u>間違い</u>」がやはり日本語にも英語にも共通してあることに思い当たり、「<u>間違い</u>」を漫才に、<u>笑いに昇華することによる学習効果が確かにあるのだらうと実感した</u>。このように、「<u>間違い</u>」だけでなく<u>その他の言語間での違い</u>などから得られる学びは多く、そのため言語学習における漫才が果たす役割はさらに大きくなっていくのではないかと、また漫才が一種の勉強法のようになれば更に「<u>楽しい</u>」言語学習になるのではないかと考えた。</p>

5-2 漫才ネタ作りと発表のプロセス:養える能力や知識は何か

90分2コマの漫才ワークショップで、受講学生に身につくものは何だろうか。今回の活動では、漫才づくりと授業の場での発表(ネタ見せ)による共有を行った。学生の授業コメントの内容も踏まえ、学生は漫才を「する」機会を得て、以下のことを経験したといえる。

- ・プロの芸人の講師(第二著者)から漫才の基本的な枠組みやネタの作り方、多言語漫才の基本についての教示を受けた
- ・ネタを10分でペアの学生と二人で協力して仕上げた+言語学習の失敗を含む経験を出し合い、共有した
- ・恥ずかしさや緊張を多少感じつつも漫才ネタを披露し、プロの芸人の講師からの丁寧かつ明快なフィードバックを得た
- ・参加者として、お互いのコンビ(ペア)の漫才を味わった

学生の漫才ネタおよび授業コメントから、以前は見る/聞く側だった漫才であったが、漫才ネタ作りにより、その言語学的分析の視点も獲得しつつあることが認められた。学生の漫才ネタを、金水(1992)のボケのタイプに対応づけ、流れを確認してみると、言語の特徴を意識したネタ作成であったことがうかがわれる。また、学びの2点目として、言語学習における「間違い」の使い道の可能性への気づきも挙げることができる。さらに、間違いを含め、日本語の対象とした言葉や表現、談話を、ほかの言語、あるいは、ほかの形式を対照させながら組み立て、何らかのズレ(その一つが間違い)を生じさせる経験を通し、普通の言い方とずれた言い方という複数の視点による言葉の使い方を確認しながらネタを作成し、日本語やほかのよく知っている言語を相対化させて捉えることができた経験になったとも言える。つまり、漫才を、多言語・多文化的な観点と結びつけて捉える機会となったのではないかと考えられる。

Ackermann(2010)は、種々の異文化コミュニケーション理論を踏まえつつ、言語学習は、「知っていること」と「できること」(「知識」「認識」と「行動」「感情・情意」)の相互作用とバラ

ンスが重要であり、「できる」能力は、発信面のみならず、適切に解釈する、受容的・共感的な面も含まれると同時に、関連する人間の体、神経の適切な反応が必要となることにも言及する。コミュニケーションは、自らと相手双方の有する知識と行動パタンの共有化によって成り立つとし、一瞬一瞬その場で、「接点を模索する力量が言語能力の本質である」と述べる(pp.1-2)。

漫才ワークショップにおいて、受講学生が漫才ネタを作り、披露し合う試みは、ペアとなった学生がお互いの経験を踏まえ、知識と行動パタンの共有と反応が起こる場となった。さらに、ネタ披露により、クラスの参加者、講師、授業担当者、TA(授業サポートの大学院生)がコミュニケーションへの参加者となり、知識、行動の共有の場となった。プロの芸人であるワークショップ講師からの明瞭で肯定的なコメントも、各ペアそれぞれの心に残るものになったと言えよう。

最後に、もう一名の2022年度受講学生のコメントを紹介したい。

「前は英語での漫才を発表したので、日本語で漫才を作ることができて楽しかったです。クラスメイトとの思わぬ共通点が見つかり、思ってもみなかったようなネタを作ることができて、漫才づくりはアイスブレイクにも役立つのではないかと感じました。

また、今回、質疑応答では日本のお笑いの世界の状況を、テレビの産業構造も踏まえて、漫才をしているかたからうかがうことができて非常に勉強になりました。政治は私達の生活に密接に関わっているもので、私達自身で動かすことのできるはずのものなのに、影響力のあるメディアであるテレビでその批判を放送することができないという状況はとても歪だと思えますし、変えていくべき状況であると思えます。」

コメントで記されているように、今回のワークショップが、クラスメイト同士のコミュニケーションによるネタ作り、披露の機会となると同時に、漫才という切り口で「メディア日本語」科目での学習内容や社会を再考する機会ともなったことを伝え、筆を置くこととする。

付記

本稿の漫才ワークショップに関する記述は、外国語教育メディア学会第71回大会ポスター発表「学部学生によるミニ漫才づくり(日本語・英語)とネタの特徴:学部言語科目における漫才ワークショップと学生による漫才への分析可能性への発見」に大幅に加筆・修正を行ったものである。なお、漫才ワークショップ実施にあたり、本学国際日本学研究院競争的経費(学部教育)を得た。

漫才ワークショップでは、ゲスト講師(第二著者であるフランポネのマヌー)とともに、ボランティアでゲスト参加をしてくださったフランポネのシラちゃん、藤田ゆみさんに大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

鈴木 美加(すずき みか、SUZUKI, Mika)

東京外国語大学国際日本学研究院教授

島岡 学(しまおか まなぶ、SHIMAOKA, Manabu)

吉本興業

参考文献

- 金水 敏(1992)「ボケとツッコミ:語用論による漫才の会話の分析」『上方の文化:上方ことばの今昔』和泉書院 pp.61-90
- 申 彩然(2016)「日本語の笑いのパターン分析—談話分析における語用論の方法論を用いて—」『一橋日本語教育研究』4, pp.197-206
- 鈴木 美加、島岡 学(2022)「多国籍の学生と芸人・教師による漫才ワークショップ—「メディア日本語:メディアとメッセージ」授業における試み—」pp.95-115
- 中河 伸俊(2016)「談話標識としての笑いと『お笑い』:フレーム分析の実用のための試行的検討」同志社社会学研究20, 2016, pp.1-17
- 長谷川 一、村田 麻里子(2018)『大学生のためのメディアリテラシー・トレーニングテキスト』三省堂
- 樋口 耕一(2018)『社会調査のための計量テキスト分析:内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- Ackermann, Peter (2010)「異文化理解に必要な言語能力とは何か」日本国際理解教育学会第20回研究大会資料 <<http://peterackermann.net/wp-content/uploads/2010-%E7%95%B0%E6%96%87%E5%8C%96%E7%90%86%E8%A7%A3%E3%81%AB%E5%BF%85%E8%A6%81%E3%81%AA%E8%A8%80%E8%AA%9E%E8%83%BD%E5%8A%9B.pdf>> (2024年2月29日閲覧)